

第89回二松學舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時 平成十六年六月十二日（土）
場所 九段校舎本館中洲記念講堂

雅楽レクチャーコンサート

瑞穂雅楽会主席楽師・学習院大学講師・東京芸術大学講師

三田 徳明 先生

瑞穂雅楽会

研究発表

《国文学》

『病牀六尺』第三十三回の構造

東京都昭島市立清泉中学校教諭 乙 幡 英 剛

正岡子規は、幼少時より能への関心は高く、晩年の『病牀六尺』（明治三十五年）においても、九回に亘り能について記している。

内容的には①狂言や歌舞伎等他の芸術との比較 ②「能楽」の現状と問題点 ③近況報告とに分けることができるが、特に②に属する第三十三回（六月十四日）においては、「今將に衰へんとする能

楽」にまつわる「悪習慣」の存在を指摘するとともに、今後「保護」「維持して行く」ための独自の改革論を述べていることは興味深い。

その一方で、現在の能楽史においては、明治三十年代はむしろ隆盛期にあり、子規の指摘とは食い違いがあること、子規の能に関する情報の入手経路など不明確な点もある。

そこで本発表においては松田存氏らの先行研究をふまえ、①第三十三回の構成 ②子規の能楽の認識とその背景 ③雑誌『能楽』及び「同郷の先輩」池内信嘉との関係を通し、第三十三回の構造を考察する。

そこには、能を日本古来の芸術として改めて評価しようとすると同時に、病床にありながらも新聞『日本』の記者として自らの考えを社会に向けて発信しようとする子規の姿が見られるのである。

川端康成「日本人アンナ」論

博士前期課程二年 館 健 一

川端康成「日本人アンナ」は、昭和四年三月九日「東京朝日新聞」紙上に発表された。高校生の〈彼〉と、〈革命に追われた漂泊のロシア貴族の孤児〉という〈アンナ〉との交流を描いた掌編小説である。